



notice

令和2年度土木学会選奨土木遺産が認定されました!

「土木の日」(11月18日)にちなみ、毎年11月に記念講演会とともに開催される「選奨土木遺産認定書授賞式」(主催:公益社団法人土木学会北海道支部)は、今年は新型コロナウイルス感染拡大のため開催中止となりました。ここでは授賞式で顕彰される予定であった令和2年度の北海道の選奨土木遺産について受賞理由などをご紹介します。土木学会選奨土木遺産委員会により本年度は全国で26件、北海道では以下の2件が認定されました。



金山ダム(南富良野町)

【受賞理由】金山ダムは、中空重力式構造やフロート式取水塔等先駆的技術を採用、北海道総合開発計画の下、建設された治水・農業・水道・発電用多目的ダムです。

金山ダムは、1967年南富良野町に竣工し、空知川中・下流や石狩川中・下流の水害軽減と沿川のかんがい用水補給、水道水供給、発電に寄与してきました。2016年8月の台風による洪水災害時に効果を発揮するなど地域に貢献し、貯水池「かなやま湖」はキャンプ場を中心に多様なアウトドアを楽しめる観光スポットとなっています。



神居大橋(旭川市)

【受賞理由】神居大橋は、景勝地神居古潭に架かる吊橋で、当初の木製補剛トラスの形式を継承しつつ改修され、かつての木橋の姿を今に伝える貴重な土木遺産です。

石狩川上流の渓谷に架かる神居大橋は、1938年に現在の原型となるものが建造され、72年に大幅に改修、補強されて現在の吊橋となりました。その後もたびたび補修を重ね、大正・昭和の道内の木橋の特徴を残しつつ、現在も安全に供用可能な人道橋として、また名勝・神居古潭を望む絶景ポイントとして親しまれています。



notice

第20回「野生生物と交通」研究発表会のお知らせ 《オンライン開催へ変更》

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、第20回「野生生物と交通」研究発表会をzoom(ウェビナー)によるオンライン開催に変更することとなりました。

野生生物と交通に関心を持つ多くの方のご参加をお待ちしております。

- ◆開催日: 2021年2月15日(月) 10:00~(予定)
- ◆会場: オンライン(zoom)
- ◆パネル展示: 無料[オンライン展示・締切: 2021年1月12日(火)]
- ◆聴講: 無料[完全申込制・締切: 2021年2月5日(金)]
※受付完了後、視聴URL等オンライン接続に必要な情報をお送りします。(開催1週間前頃)
- ◆講演論文集: 2,500円(事前予約で当日までに郵送)[締切: 2021年2月5日(金)]
- ◆申込方法: 「野生生物と交通」ウェブサイトよりお申し込みください。

お問合せ: (一社)北海道開発技術センター「野生生物と交通」研究発表会担当係(担当: 鹿野・向井)
TEL: 011-738-3363 FAX: 011-738-1890
E-mail: wildlife@decnet.or.jp ウェブサイト: <http://www.wildlife-traffic.jp/>

編集後記

明けましておめでとうございます。今年は延期になったオリンピックがいよいよ開催!少しでも街に活気が戻ることを期待するばかりですね。今回は、コロナ禍の鬱屈とした空気を一扫するような、世界的スケールの写真展&写真集をご紹介します。友達の弟くん、ニセコ在住のスキーアクション写真を専門とするフォトグラファー兼シネマトグラファー 嶋貴泰至(しまぬきやすゆき)さんが、アイランドのロードトリップで撮影した写真をアート作品として作成した写真集「isjaki」(アイランド語で『流水』)を発売。1月初旬まで、ホテル 木ニセコ1Fの杏ダイニングで写真展と写真集の予約・販売をされているとのことなので、ご興味のある方はぜひ! (M.K)



dec monthly vol.424

2021年1月1日発行

発行人 山口 登美男

編集人

発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター

TEL(011)738-3363 FAX(011)738-1889

URL

<http://www.decnet.or.jp/> 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

E-mail dec_inh001@decnet.or.jp



dec monthly

2021.1.1 vol.424 デックマンスリー

Hokkaido Development Engineering Center



● Monthly Topic (マンスリートピック)
〈歴史と文化から地域の未来を考える〉
イザベラ・バードが辿った「みち」を活かして

新年のごあいさつ >>> 一般社団法人 北海道開発技術センター 副会長 田村 亨

令和の時代を迎え、わが国は様々な課題に直面しています。とりわけ世界史に残るこの度の新型コロナウイルス感染症の拡大により、日本と世界の繋がり、私たちの生活、社会のあり方が変わってきているように感じます。

今道民は、どれだけ「災い転じて福となす」ことができるのかを試されているのではないのでしょうか。すなわち、コロナによって浮かび上がってきた北海道の具体的な弱点をどう克服するかということです。

例えば、わが国のデジタル化は、先進国の中でも大変遅れていることが明らかとなりました。積雪寒冷で広域分散型地域構造を持つ北海道において、デジタル化は交通サービスの向上や建設業の人手不足解消なども強く関係しています。

交通のデジタル化を考えてみましょう。大きな病院へ公共交通機関で通院する人にとって、路線バス停留所までの2次アクセス交通の確保は重要です。また、北海道開発局の物流インフラ維持調査によって名寄以北から大都市への物流量の減少に伴う配送手段確保の必要性も分かってきました。デジタル技術を使った解決方法として、利用者の需要に

合わせて送迎するバス事業や道の駅を農産品共同集荷場として活用する動きなどがあります。デジタル化が進むと個人情報の問題が生じてきますが、新しい社会づくりは与えられるものではなく、地域から湧き上がってくる勢いが必要です。地域が主体となりあいまいな私権と公権の境を整理し、利用者とサービス提供者が合意し契約できれば、デジタル化を進めることができるはずで

す。一方、コロナによって変化が加速したこともあります。例えば、若い世代を中心にリモートワークが進み、働き方や暮らし方の多様性を重視する動きが広がっています。人々の活動の多様化は地域に個性を生み、地域づくりの多様性をもってリスクに強い北海道に生まれ変わることができます。北海道においても、自分にはできるし、やろうと考え、周りの人を巻き込んで実行しようという人が増えており、このような行動変容が進めば大抵の危機は乗り越えられます。

コロナとの闘いはさらに続きますが、2021年は、洗練された自然が残る北海道から新しい世界が構想され実践される年となることを願っています。

明けましておめでとうございます。
本年もどうぞ宜しく願い申し上げます。



第1部 基調講演

シーニックバイウェイ北海道、道の駅第3ステージとイザベラ・バード

石田 東生 氏 [筑波大学 名誉教授・(一財)日本みち研究所理事長]

停滞の平成の30年間を経て危機に直面した日本を次に襲ったのがコロナ禍です。これほど長期間、世界的に移動が急激に減少したことは700万年にわたる人類の進化史上初でしょう。勇気を持ち、明るく・楽しく・前向きに「あ・た・ま」を使い、ITという有力な武器を適切に活用しながら困難を乗り越えたいものです。

そうしたなかで、「道の駅」は第三ステージとして世界ブランドを目指し、「地方創生と観光を加速する拠点」

への挑戦を始め、シーニックバイウェイ北海道も広域の地域活動をつなぐ運動論として成果を上げています。イザベラ・バードが著した優れた紀行は両者を結びつける連携要素として有力な物語です。(一財)日本みち研究所では「日本奥地紀行」出版140年記念事業として山形、横浜、日光でシンポジウムを開催しましたが、今後より大きな連携の輪を広げ、彼女の足跡や意義を再発見する地域活動を支援していきたいと思っています。



イザベラ・バードの辿った北海道の道

金子 正美 氏 [イザベラ・バードの道を辿る会 会長]

イザベラ・バードは1878年8月、函館から大沼(尊菜沼)、森町まで陸路で、そこから船で室蘭に渡り白老、勇払と進み、平取に到着。旅の目的はアイヌ民族の生活と文化を記録することでした。復路は噴火湾沿いの陸路をとり、道内では総距離約576kmを旅しました。

私は1999年にバードの著書の翻訳者・金坂清則氏の新聞記事をきっかけに、専門である地理情報システム(GIS)を活用してバードの道を復元することを思いつきました。その後、私の研究室で平取町出身の学

生が卒論でこのテーマに取り組み、また北海道環境財団の故・辻井達一先生の賛同を得て2007年に「イザベラ・バードの道を辿る会」を設立しました。会では解説板の設置やフットパスコースの整備、マップの作成、エコツアーの開催、また独自のストーリーマップをウェブ公開しています。私はSDGs(持続可能な開発目標)の教育を推進する活動にも携わっており、その理念を大切に活動していきたいと思っています。



第2部 地域の現状

ウポポイと白老のみち

今井 太志 氏 [公益財団法人アイヌ民族文化財団 専務理事]

ウポポイは7月12日のオープン以来、コロナ禍による制限営業を続け、直近4カ月の入場者は15万3千人です。国立アイヌ民族博物館を中心とした広大で多様な施設は当財団職員を含め総勢約400人で運営され、来場者とスタッフのコミュニケーションを大事にして

います。若いスタッフとともに成長していく施設として今後を見守っていただきたいところです。白老町も駅前整備や観光インフォメーションセンター開設、また、星野リゾートの温泉施設の開業予定など民間投資も活発化し、大きく変化、発展しつつあります。



日高の恵みを美しい半島で出会う道で - シーニックバイウェイで魅力ある空間づくり

渡辺 勝造 氏 [新ひだか町商工会 事務局長]

日本最後の山岳秘境と呼ばれる日高山脈と太平洋にはさまれた日高地域には、ユネスコ世界ジオパーク認定のアポイ岳ジオパークや、国立公園化の検討が進む日高山脈襟裳国立公園、桜並木の静内二十間道路など豊富な観光名所があります。一方、交通網はJR日高本線鶴川一様似間の廃線が決ま

り、苫小牧一浦河を結ぶべく整備中の日高自動車道の全線開通が待ち望まれています。シーニックバイウェイ北海道に関して日高は「未開の地」という現状ですが、今後、日高の新しい旅づくりをするためにその推進に努力したいと思っています。



イザベラ・バードが辿った 「みち」を活かして



イザベラ・バード(1831~1904年)は19世紀に世界各地を旅した英国の旅行家で、1880年に出版された『Unbeaten Tracks in Japan(『日本奥地紀行』)』には、明治初期の道南の旅(函館~平取)が活写されています。標記シンポジウムでは、バードが北海道で辿った「みち」を重要な地域資源として今後に生かしていくための視点、方策について活発な議論が行われました。主な発言をご紹介します。

トークディスカッション

第3部 「イザベラ・バードが辿った“みち”を現代に活かす」

- ・石田 東生 氏(コメンテーター)[筑波大学 名誉教授・(一財)日本みち研究所理事長]
- ・原文 宏 氏(コーディネーター)[(一社)シーニックバイウェイ支援センター 代表理事]
- ・新保 元康 氏 [NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム 理事長]
- ・笹森 琴絵 氏 [イザベラ・バードの道を辿る会 室蘭支部 会長]
- ・今井 太志 氏 [公益財団法人アイヌ民族文化財団 専務理事]
- ・山本 清二 氏 [国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部 次長]



◆山本 清二 氏

札幌に開拓使が設置された4年後の1873年、函館から森町、海を渡って室蘭から札幌へ至る「札幌本道」が完成しました。バードの来道時には完成していましたが、当時の道は大雨でぬかるむなど通行は容易でなかったようです。戦後の北海道は北海道総合開発計画のもとで幹線道路ネットワーク整備が進められましたが、現状の高規格道路の整備率は全国平均約86%に対して、当部で担当している日高自動車道も計画約120kmの半分の整備状況となっているなど、北海道はかなり遅れていると言えます。

胆振日高地域は、13の道の駅がそれぞれ地域の特色を生かして人気を得ている一方、シーニックバイウェイ北海道については「支笏洞爺ニセコルート」が指定されておりますが、まだまだ空白地があります。白鳥大橋のインフラツーリズムを含め地域には多彩な魅力の要素があるので、それらの連携が進むように影ながら力を尽くしたいと思っています。

◆新保 元康 氏

学校から北海道全体を扱う副読本がなくなって40年が経ち、子どもたちに「北海道」は十分学ばれていません。私は小学校教員を長く務めた後、2019年に「北海道を、誇りを持って語り、未来に参画する人材を育てたい」とNPO法人ほっかいどう学推進フォーラム」を設立しました。現在の活動は「ほっかいどう学新聞」発行、道内各地でのセミナーやインフラツアーの開催、SNSやホームページでの情報発信など。セミナーは社会資本関連の技術者や行政、企業、学校教

員など多様な人々が学び合う貴重な機会になっています。

子どもたちがイザベラ・バードを学ぶ価値はととも大きく、①日本の良さの理解を深め、②生活を支える「みち」の大切さ、③旅の大切さや面白さ、を知り、ICTの活用で一層、教育的価値を高められると思います。今後、多くの教科書にバードについて一言でも掲載されればと願うところですが、私たちの手で教材用ビデオクリップをつくるなどの方法もあると思います。

◆笹森 琴絵 氏

私は海洋生物調査員、また写真家として室蘭で長く観光に絡んだ活動をしてきました。バードは「室蘭は絵のように美しい小さいまちで、美しい湾の険しい崖にあり〜」と書いており、室蘭の海洋観光とバードを関連づけて室蘭観光に歴史的深みを持たせ、バードの軌跡に新しい可能性を吹き込んで地域振興に寄与できればと思います。室蘭の観光資源は大黒島や森蘭航路(フェリー)、イルカウォッチングなど豊富で、また複数の団体が、イタンキ浜の保全など環境教育や保護活動に取り組まれています。今後はアイヌ民族の世界観も現行の観光に生かし、個々の取り組みの垣根を取り払うことによって、バードの歩いた噴火湾における多様な要素が広くつながり、一大観光構想(例えば「Sea-nic Bird-wayな湾(ONE)チーム構想」)が成立することを期待したいと思います。

◆今井 太志 氏

バードが北海道の旅で目指したのは平取であることはもっと注目され

ていいと思います。平取では現在もアイヌ工芸を伝えようと、多くの人が積極的に取り組んでいます。白老のウポポイはアイヌ文化の一つの入り口であり、道内各地でその伝統は異なり、それぞれに伝承活動が行われています。アイヌ文化に関する道の取り組みでは「シャクシャインの戦い」にちなんで「シャクシャイン・ロード」(長万部町一新ひだか町)の連携例があります。

◆石田 東生 氏

バードは地域を見る目が素晴らしく、北海道は豊かな平地で穀物がとれるから、将来は人口600万人はいけるだろうという卓見も書いています。本州より北海道を気に入っていたことがうかがわれ、道内ではバードをもっと顕彰し、学ぶべきでは。バードをきっかけに英国など欧州からの観光客増加を期待していますが、ほっかいどう学や観光情報と結びつけてビデオクリップを作成、発信するのは良いアイデアだと思います。

◆原文 宏 氏

「イザベラ・バードの道を辿る会」では七飯、白老、平取などバードの軸をつないで部会活動が行われ、素晴らしい。バードと同じような道をシーボルト、パチェラー、プラキストンらの外国人、また、松浦武四郎、近藤重蔵、最上徳内などが辿ったことを考えれば、豊かな歴史文化軸の資源を今後、顕在化させ、公共交通などのモビリティ、サイクリングなどのアクティビティとうまくミックスして地域振興に結びつけたいものです。東北で開催された「イザベラ・ヘブン」という長距離自転車競技イベントを北海道でも展開できればと思います。